

府中町あるものと歴史散歩

「第30回」

文化財としての考古学の資料⑩ 古墳時代の資料（3）

府中町における古墳は、いずれも古墳時代の後期（六世紀中頃）に造られたものである。

「歴史散歩第25回（平成17年12月1日号広報）」で紹介した上岡田地区一帯に点在する上岡田古墳や道隆寺東古墳（八幡古墳）が一基存在していたことが知られているが（遺跡分布図参照）、古い時代の盗掘やその後の開発などで完全に消滅し、今ではその痕跡すら確認できない。八幡古墳は、過去の記録により横穴式石室の古墳であったことが知られているが、その構造と規模については全く不明である。出土した須恵器など副葬品の一部が歴史民俗資料館2階に大切に保管展示されている。須恵器は平瓶（写真参照）というもので、口縁部分が継続する。須恵器は平瓶（写真参照）

ぎ目からそつくり脱落しているが、胸部は殆んど残っている。このほかに数点の須恵器があつたが、古墳の近くにあつた若宮神社の地下に埋めたと伝えられている。（現在は若宮神社は存在しない。）

これらの資料から、かつてこの地域を基盤とする有力者が存在していたことが推定できるが、府中町地域には大規模な古墳は造られていない。

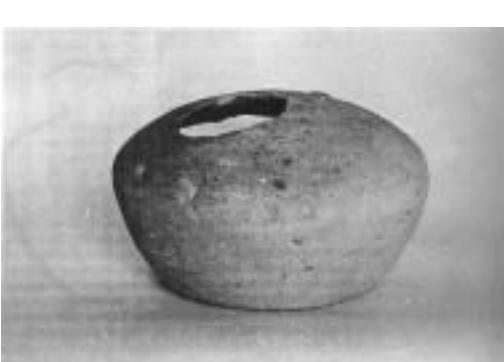
しかし周辺地域を見ると、太田川流域には、近畿地方の大和朝廷は統一過程で服属した各地方の王などの首長層を新しく国という領域を単位とする國造に任命し、その国内の政治をあたらせるという体制に向かうのである。安芸国造は、ほぼ

にもめぐらされている。石室から鏡・勾玉・管玉・鉄劍・鉄鋸などが多数副葬されており、古墳の大きさはもとより築造方法、遺物の種類の豊富さなどから、一地域の有力豪族といつたものではなくて、これらの豪族たちを束ね、一段と上にたつた大豪族、即ち、安芸国造の墓として考えられている。

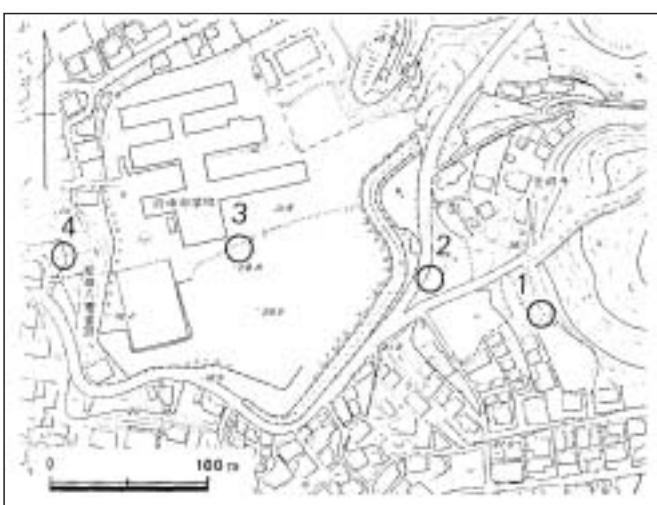
後の安芸一国を支配したものと考えられている。三ツ城古墳は西条盆地のほぼ中央にある江熊の丘を利用して造られた高さ13mのおおきな前方後円墳であったため、三階建のビルに相当するモニュメントとしての壮大な墓の出現に、当時の人々は大陸伝來の土木工事技術と墓の主の権力の大さに驚いたに違いない。

問い合わせ
教育委員会生涯学習課
☎ 286-3272

府中町文化財保護審議会会長
横田禎昭



八幡古墳出土の平瓶



八幡地区の遺跡分布図

1. 八幡古墳
2. 八幡貝塚
3. 散布地
4. (土師質土器)